



Title	トマスにおける創造論と目的因
Author(s)	飯塚, 知敬
Citation	長崎大学教育学部紀要. 人文科学. vol.60, p.1-7; 2000
Issue Date	2000-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/5770
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-28T18:21:01Z

トマスにおける創造論と目的因

飯塚 知 敬

A Consideration of Thomas' Theory of *creatio and causa finalis*

Tomoyoshi IIZUKA

はじめに

トマスにおける流出論 *emanatio* は彼の創造論である。そして神による被造物の創造は『神学大全』¹⁾において、全存在の流出 *emanatio totius esse* として説明されている。これは被造物としてのある特殊な原因、二次的な原因からの流出ではなく、あくまでも普遍的な原因 *causa universalis* としての神からの全存在の流出であり、従ってまた何らの材料も前提としない存在の産出である。それゆえ無からの創造 *creatio ex nihilo* とも言われる。²⁾

このような無からの創造というトマスの世界観に立つなら、この世界のすべての事物は直接に神から創造の業によって流出しているのであり、それゆえすべての事物は神から存在を与えられている。従ってこの世界の事物は神に存在を負っており、従って神のために存在しているといえることができる。しかしこの場合の「神のために」とは具体的にどういふことなのであろうか。

それは神が事物の存在の目的因であるとして一応、理解されよう。実際トマスは『神学大全』第一部第44問題、第4項において「神はすべての事物の目的因であるか」を問題とし、そこで神がすべての事物の目的因であることを肯定しているのである。世界の事物にとって神はその存在の根拠であり、存在意義であると考えられる。それゆえこの世界の事物は自分の存在の根拠としての神を求め、神に憧れ、神に近いものとなろうとしていると考えられる。

しかし、同時にトマスは第47問題においてこの世界の事物の内に見られる区別 *distinctio* や不均等性 *inaequalitas* について、それらが直接に神に由来するのかどうかを問題とし、それを肯定している。³⁾ それは神がこの世界を完全なものとするために予めこの世界を一なる意図に基づいて創造したということの主張でもある。そしてそのことは個物が直接神をその存在の目的として持つと同じように<全体としての世界>も神をその目的として持つということである。従ってトマスの立場に立つと、すべての事物は普遍的な能動者としての神を自己の存在の目的因として持つ一方で、この全体世界を構成する部分として、この世界の完全性のために神からこの世界へと秩序づけられているということになる。

それではこの世界における事物の二つの目的はどのように関係するのであろうか。この小論においては、この二つの目的の関係を彼のテキストに即して考察し、そのことを通し

て彼の流出論について何かの手がかりを得ることを目指したい。先ず、第一章において第44問題第4項を参考にしながら、神がすべての事物の目的因であるということの意味について考える。次に第二章において第47問題1項と2項を中心に事物の区別と不均等性の考察を通して<全体世界>と神の創造について考える。最後に第三章で、トマスの流出論における二つの目的の関係と流出論について何かの手がかりを得たい。

第一章 神はすべての事物の目的因である。

トマスは『神学大全』第44問題第4項において「神はすべてのものの目的因であるか」*utrum Deus sit causa finalis omnium*を問題としている。神はすべての事物を産出した。それゆえこの世界の事物は神を目的 *finis* として存在している。ところで神がこの世界を産出するという場合に、産出するという神の働きの目的は何であろうか。というのも神がこの世界を産出する目的が、この世界の事物にとっての存在の意義となり、目的ともなるだろうからである。ところが第一異論で述べられているように、神は自分自身に何かの必要性があつてこの世界を創ったわけではない。神はそれ自身において完全なのだからである。それゆえトマスが第一異論解答で述べているように神は自分の便益 *utilitas* のためではなく自己の善性 *bonitas* のために世界の事物を産出したとされる。そしてそれゆえ最高度に自由であると述べている。

トマスが本文で述べているように、神は創造という働きにおいてその働きの目的である世界の事物が自分に欠けており、それを獲得するために創造という働きを行ったわけではない。そうではなくて第一能動者としての神は「自分の善性、これは神の完全性であるが、それを伝達する *communicare* することを意図した」とされる⁴⁾。それゆえ神の能動の目的は自分の善性を被造的世界に伝えることそれ自身だということになる。第二章において考察される第47問題、第1項の本文で述べられているように、神からするとこの世界において産出された被造物がそれぞれの存在において自己を完成し、そのことによって神の善性を再現 *repraesentare* することが神の創造という働きの目的だということになる。それゆえトマスは「すべての事物はそれぞれの完全性を求めているが、これは神の完全性と善性の類似 *similitudo* である」⁵⁾ と述べ、被造物がそれぞれの完全性を実現することが神の創造の目的だとしている。

ところでこの再現する *repraesentare* ということを考えてみると、そこには神と被造物とが一応、別の存在を持つことが前提されていると言えよう。被造物の存在は神から与えられ、その存在において神から支えられていることを要するとしても、神の善性がそこにおいて再現され、映し出されるためには被造物の存在は一応、神から独立したものとして、神の存在と区別されている必要がある。つまり被造物の善性は神の善性の類似性 *similitudo* ではあっても神の善性そのものの一部ではあり得ない。それによってこそ、神は他者として、神から独立する存在としての被造物の善性のうちに自己の善性を再現することが可能となると言えよう。

このことは先に見たように、神が被造物を産出する場合、その目的は神に欠けているものを獲得するためではないということからの帰結でもある。従って神の善性はこの世界の存在によって増えることもなく、またそれを失うことによって減少することもない。つま

り被造物は神の善性の部分を構成しているわけではないのである。

それゆえトマスは第45問題第3項で「創造とは被造物において自分の存在の根源としての創造者に対する関係以外ではない」*creatio in creatura non sit nisi relatio quaedam ad Creatorem, ut ad principium sui esse*;とも述べているのである。このことは、被造物自身を考察しても直接に神に対する何かの具体的な内容が見出されるわけではないということを意味している。被造物の存在の内に神の類似性としてのある完全性が見出されるとしても、個々の被造物はあくまでもこの世界における一つの事物としてあり、それは決して神の善性の一部を直接に構成するものではなく、この世界に属しこの世界における数々の善性の一部を構成している。

動物はこの世界の環境に適応することで様々な善性を有するし、植物は例えば動物の食糧として役立つことでその善性を示していると考えられる。そしてこの世界のそれぞれの事物はこの世界における他の事物の善性に依存しないことには自己の完全性を完成することもできない。例えばある動物は植物を食べないことには自己の完全性を完成することもできないだろう。

つまりこの世界の事物は神の類似としての自己の完全性の実現を目的として存在するのだけれども、その実現のためにはこの世界における他の善によって完成される以外にはないのであり、その意味では神に向かうという目的を果たすためにこの世界の秩序に従わざるを得ないということになる。

以上の考察から理解されてきたことは、神がこの世界のすべての事物についてその存在を産出しており、それゆえ神はこの世界の事物にとって存在することの目的因であること。そしてこの世界の事物はこの目的の実現のために神の完全性の類似としての自己の完全性を求めること。しかし、そのためにはそれぞれの事物がこの世界の秩序に従って、この世界において完成されることが必要であること。従って、このような両者の関係からすると、この世界の事物にとってはこの世界の秩序のために働くことは神を目的として向かうことへの不可欠な手段であると考えられることになる。

それでは次に全体としての世界が神に対してどのように関わるかについて第二章において具体的に考察してみよう。

第二章 事物の区別と不均等性について。

トマスは第47問題第1項で「事物の多様性と区別は神に由来するか」*Utrum rerum multitudo et distinctio sit a Deo*を問題としている。本文において、トマスは先ずこの世界の事物における多様性、区別の原因を神以外に求める3つの説を提出し、そのいずれも退けている。第一の説はこの世界の事物の多様性、区別をマテリアの運動に求めるものであり、トマスはこれを自然学者の説であるとし、その代表者としてデモクリトスを挙げている。第二の説はマテリアに混合していたものを知性が取り出すことによって事物における区別が生じたとするもので、トマスはこれをアナクサゴラスの説だとしている。第三の説は、神が自己自身を認識することから第一実体が産出され、この第一実体が第一原因を認識することで第二実体を生み、可能態にある限りでの自己を認識することで天体を生じ、現実態にある限りでの自己を認識する限りで世界霊を生じるというものである。ト

マスはこれをアピセンナの説であるとしている。

トマスはこの3つの説をいずれも退けている。第一のマテリアに原因を求める説に対しては、この説明ではこの世界の事物における多様性の存在が単なる偶然に過ぎなくなってしまうとする。第二の説に対しては、もしもマテリアの内に原因があるとしたら、マテリア自身が神の創造によっているのだからその多様性の原因は更に高くさかのぼって捉えられるべきであるとする。また形相のためにマテリアがあるのであり、逆ではないのだからマテリアにおける多様性の原因よりも先ず、形相の多様性の原因を求めるべきであるとする。また第三の説に対しては、一つにはそもそも二次的原因が創造を行うことはできない。またこの説では多様性が偶然の結果ということになるとする。

トマスのこれらの説に対する批判における主要な論拠は、これらの説明ではこの世界の事物における多様性や区別が偶然の結果になってしまうという点にあると考えられる。何故ならこの論拠は次の第2項においても、また他の個所においても重要なところでトマスによって提出されているからである⁹⁾。このように偶然ということがトマスから批判されるのは、彼が神の創造の立場からこの世界を見ているからに他ならない。トマスは神が一なる意図 *intentio* を持ってこの世界を創ったとし、この世界があくまでも偶然の結果としてあるのではなく神によって予め配慮されて形成されていると主張する。この世界が第二原因ではなく、知性と意志とによる普遍的な原因としての神から流出するとするために、トマスにとってはこの世界の結果はすべてが予め意図されたものであり、決して偶然ではあり得ないのである。

またトマスにとってはこの世界が多様性を持つことは神がこの世界を創造した目的、つまり神の善性を被造物において再現することから来る帰結であり、そのことから説明されなければ多様性の存在の根拠が示されたとは言えないのである。つまり本文で彼が述べているように神の善性は一にして単純であるが、その神の善性を被造物において再現するためには明らかに一つの事物では不十分なのであり、そのために多くのそして様々な被造物を必要としたのである。

また続く第2項では「事物の不均等性は神に由来しているか」 *Utrum inaequalitas rerum sit a Deo* が問題とされている。第1項におけるトマスの立場からすれば不均等性も区別の一種と考えられるので、これも直接神に由来することはある意味では当然のことであると言える。しかし、この項においては第三異論におけるいわゆる「配分の正義」の観点からの批判が重視されているのである。この異論によれば、不均等なものに対して不均等なものが与えられるところに正義が成り立つのである。この世界の事物は神によって一定の秩序のもとにあるものとして産出された。神はそれぞれの事物を無からいきなり完全性のある一定の段階に置き、結果としてそれぞれの事物の間に不均等性が生じたのであって、これは先の正義に反するとするのである。

これと関係する説として、トマスは本文においてオリゲネスの説を挙げている。彼はマニ教が善と悪の対立から事物の区別を説明することに反対して、最初に神は同一の理性的被造物を創ったとした。そしてこれらの内あるものどもは自由意志によって神へと回心し、またあるものどもは神から離反した。そこで神へと回心したものはその程度に応じて、ある段階を形成する天使とされ、離反したものどもはやはりその程度に応じて、種々なる物体と結合された。こうして物体が創造されたのであり、これにより物体的事物に区別が生

じたとする。

この説をトマスは二つの点から批判している。第一の批判はこの説によると、物体は神の善性を被造物に伝達する為に創造されたのではなく、神からの離反者を罰するために創造されたということになってしまう。しかしこれは『創世記』冒頭の「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」⁷⁾という言葉と矛盾する。第二にアウグスティヌスの『神国論』⁸⁾からの引用を行いながら、これでは例えば太陽が1つであるということも、被造物としての理性的存在者の自由意志に基づく偶然の結果ということになってしまう。

トマスは第1項で見たようにこの世界が偶然の世界であることを否定する。従ってこの世界の在り様が偶然であるということ自体に反対する。しかしまた同時にトマスの批判は、神が世界を創造したその目的自身に即してこの世界における不均等性が説明されていないということの内にあると考えられる。物体が創造されたのは神の善性が被造物において再現されるためにそれが必要であったからであり、従ってある物体がそれ自体が悪なるものとして、他の被造物が罰せられるために産出されたとする説は認められないのである。

つまりここでは物体が、例えば神から大きく隔たるからそれ自体として悪であるというような論じ方自体を批判していると考えられる。トマスにとってはこれまで見てきたように、神がこの世界を創ったのは神の善性を世界の内に再現するためであり、神の善性をそこに映すためには、この世界は最善のものとして創られることが必要であった。ところが、この世界が最善であるということは、世界のすべての部分が同一なものとして最善であるということの内には成立するのではない。トマスはある動物の場合を挙げて説明している。ある動物の場合、たとえ目という機能が優れているとしても、すべての部分が等しく目のもつ優位さを持ったとしたら、一個の動物としては不完全とならざるを得ないだろう。一個の動物の各部分のそれぞれが全体に対する比例に従って最善となることによってこそ一個の動物としては最善のものとなるのである。

トマスはこの世界に見られる不均等性を、神が世界を一定の構想のもとに作り上げる場合を通して説明しようとする。本文で述べているようにこの世界には例えば元素、植物、動物、人間、といった優劣の段階が存在するが、それは神からのある絶対的な隔たりに従って下がってくる段階として説明されるのではなく、神の完全性を再現するために、この世界がこの世界として最善であることを求めて、それぞれの部分が全体に対する比例に応じて、最善であることを求めているものとしていわば下から上昇する段階として説明されるのである。

従ってトマスの立場ではどの部分も全体に比例したものとして、自己の最善を求めるべきであり、どの部分も全体の完全性を構成する一部分として不可欠のものと理解されている。トマスは始めのいわゆる「配分的正義」に基づく第三異論の解答において、例えば職人が家を作る場合、先ず、異なるマテリアがあったからそれに合わせて、屋根や土台という家における各部分の区別が生じるのではなく、先ず家の全体としての完全性にそれらの部分が含まれており、そのために異なるマテリアが必要となるのである。だから職人はもしも可能ならその部分にふさわしいマテリアを創り出しさえするだろうと述べている。つまり、先ず実現されるべき全体の完全性、善性が意図され、それを実現するために各部分が構想され、その各部分を最善のものとするためにそれに相応しいマテリアが創造された。

従って、そのマテリアも当然善いものとして創られ、またどの各部分も全体の完全性、善性に不可欠なものとしてその意味では平等であるとするのである。だから〈世界全体〉の完全性を創造の目的として考えていくと、神は創造において全ての部分、個物を全体の善の実現のために不可欠なものとして予め構想しているはずであり、一切が必然の意図に基づくのであり、従って個としての完全性は〈世界全体〉の善のために不可欠な手段ということになる。

第三章 流出論と個物

第一章で見られたように、この世界の事物は神から創られ、神の善性の類似として自己の完全性の実現を目指すのであるが、しかし、そのためにはこの世界の秩序に従うことが不可欠であり、その意味ではこの世界の秩序に従うことは自己の完成という目的のための手段という意味を持っていた。

しかしまた、第二章で考察されたように、世界全体の善を創造の目的としてみると、個々の事物がそれぞれ全体に比例したものとして、完全であることが不可欠であることが理解されてきた。このことからすると、個々の事物としての完全性は世界全体としての善の不可欠な手段ということになった。

この限りでは個の完成と世界全体の完成とは対等の関係にあるように思われる。しかし、トマスは『神学大全』第47問題第2項で「どの被造物によってよりも、世界全体としての善によって最も神の善性が再現される」と述べているのであり、これからすると世界全体の善を個物としての善に優先させているように思われる。

実際、トマスは第65問題第2項において「物体的被造物は神の善性のために創られたか」*Utrum creatura corporalis sit facta propter Dei bonitatem*ということの問題としているが、その本文ではそのような目的論的な世界観を提示している。そこでは①世界の各部分においてそれぞれの事物はそれ自身の固有の働きと完全性のためにある。②より価値の劣った被造物はより高貴な被造物のためにある。例えば人間以下の被造物は人間のためにある。③個々の被造物は世界全体の完全性のためにある。④世界全体は個々の部分と共に神を目的としてこれに秩序づけられてある。それは部分において、ある種の模倣により神の善性を再現して神の栄光とするためである、としている⁹⁾。

ここでは部分は全体のためにあり、そして全体は神の善性を再現するという最終目的のためであるとされている。しかし、同時にトマスは④の最終目的において世界の全体は「個々の部分と共に」*cum singulis suis partibus* また「それら諸部分において」*in eis* 神の善性を再現するとして、世界全体と同時に諸部分を置くことも忘れていないのである。

基本的には個々の事物はこの世界の全体の完全性に貢献することによって、神の善性を再現すると一応理解されるのであるが、しかし、そのためにはそれぞれが先ず何かとしてその個々の事物として完成してあることが必要である。また貢献するという働きが現実的に担われるのは各個物においてのみ可能であるということを見ると、トマスがこの世界のあり方が偶然でないとするのは、種のレベルにとどまらず個物のレベルにまで及んでいると考えなければならない。それゆえ個物は全体の完全性のためだけにあるということはなく、やはり全体の完全性が個々の個物の存在に依存していることが同時に前提されてい

ると言うべきであろう。

また世界の全体と諸部分とが併置されているということの理由は、神の創造の目的そのものから由来すると言うべきであろう。つまり、神は世界の事物から何かの便宜性を *utilitas* を引き出すのではなく、あくまでも神の善性を再現しようとするのであり、そのような神の意図にとっては個物の完全性も世界全体の完全性もある意味では同じ重要性を持っているとも考えられるからである。

何故なら、世界全体の善によって神の善性は最大度に表現されるとしても、だからといって個物の善性は切り捨てられないのであって、それは表現ということが問題となっているのだからである。表現は量ではなく質の問題だからである。そしてこのように神の善性を表現するというトマスの思想は始めに見たように、創られた世界が神とは一応別の存在を持つとすることに基礎づけられるのであり、その意味ではこの個と全体の関係はトマスの存在 *esse* の思想と内的に深く関わっていることが理解されてくる。

しかし、これまでの考察は主として事物の世界を問題としてきたのであり、トマスは先の第65問題で挙げている目的論的な世界観においても、⑤として人間を始めとする理性的被造物が認識と愛という働きによって更に上位の仕方神を目的として持つとしている¹⁰⁾。この意味ではこの個と全体の関係も知性や意志の働きとの関係から考えられることが必要であり、それは神における三位一体論との関係で考えていくことでもある。それはこれからの課題としたい。

註

- 1) テキストはマリエッチ版を使用した。
- 2) 拙論『トマスにおける創造について』(中世思想研究28号 p.119-128) 参照。
- 3) 拙論『事物の区別について』(長崎大学教育学部社会科学論叢59号 p.17-25) 参照(特に第二章)。本論はこの論文を踏まえ、新たな視点から内容を展開し直したものである。
- 4) *S.T. I*, q.44, a.4, c. *Sed primo agenti, qui est agens tantum, non intendit agere propter acquisitionem alicuius finis; sed intendit solum communicare suam perfectionem, quae est eius bonitas.*
- 5) *ibid.* c. *Et unaquaeque creatura intendit consequi suam perfectionem, quae est similitudo perfectionis et bonitatis divinae.*
- 6) オリゲネスの説に対する批判として *S.T. I*, q.44, a.2, c)において。また後出の *S.T. I*, q.65, a.2, c)においても同説に対して「現在の世界の物的状態が偶然によるということになってしまうだろう」と批判している。
- 7) 『創世記』1-31(日本聖書協会訳)。
- 8) Augustinus, *de Civ. Dei* XI, C.23
- 9) *S.T. I*, q.65, a.2, c. *Sic igitur et in partibus universi, unaquaeque creatura est propter suum proprium actum et perfectionem. Secundo autem, creaturae ignobiliores sunt propter nobiliores sicut creaturae quae sunt infra hominem, sunt propter hominem. Ulterius autem, singulae creaturae sunt propter perfectionem totius universi. Ulterius autem, totum universum, cum singulis suis partibus, ordinatur in Deum sicut in finem, in quantum in eis per quamdam imitationem divina bonitas repraesentatur ad gloriam Dei:*
- 10) *ibid.* c. *quamvis creaturae rationales speciali quodam modo supra hoc habeant finem Deum, quem attingere possunt sua operatione, cognoscendo et amando.*